

山口 二郎 法政大学法学部教授

参議院選挙の意義

7月21日に行われた参議院選挙については、盛り上がりや欠いたという批評がもっぱらであった。しかし、その結果からは、これからの日本政治を考える際に重要な課題が見えてくる。

第1は、投票率が24年ぶりに50%を切ったことである。第2次安倍政権の発足以来、国政選挙の投票率は50%台前半で推移してきた。投票率が低いことが、自民党、公明党の勝利の大きな原因であった。今回の選挙でも投票率を低く押しとどめたことは、与党の成功であった。棄権とは、多数派への白紙委任を意味するのであり、半数以上の有権者が棄権することは国民の多数派が現状を積極的に変えようとは思っていないことを意味する。国民の間に広がる政治への諦めを打開することは、日本政治を変えるための最大の課題である。

第2は、自民党が単独過半数を割り、与党に維新を加えた改憲勢力が3分の2を割ったことである。与党全体では過半数を維持しているが、自民党にとっては政権運営の困難は増す。また、改憲勢力が3分の2を割ったことは、今後の安倍政権に大きな影響を与える。国民民主党などから改憲に積極的な議員を引き抜くという手段も取れないことはないだろう。そうなると、立憲民主党や無所属を巻き込んだ超党派的な合意を作ることは不可能になり、憲法改正が力づくの対決になる。そのような危険を冒してまで安倍政権が憲法改正に突進するのかが問われることとなる。

改憲勢力3分の2割れは、野党協力によって10の1

やまぐち じろう

北海道大学大学院法学研究科教授などを
経て、2014年より現職。専門は、行政学、
現代政治。

著書に『政権交代とは何だったのか(岩
波新書)、『いまを生きるための政治学
(岩波現代全書)、『徹底討論 日本の政
治を変える これまでとこれから』(岩
波現代全書)など。

2019参院選選挙結果 (出典:NHK開票速報)

党派	自民	公明	立憲	国民	共産	維新	社民	れ新	安死	N国	オリ	幸福	労働	諸派	無
今回	57	14	17	6	7	10	1	2	0	1	0	0	0	0	9
選挙区	38	7	9	3	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	9
比例代表	19	7	8	3	4	5	1	2	0	1	0	0	0	—	—

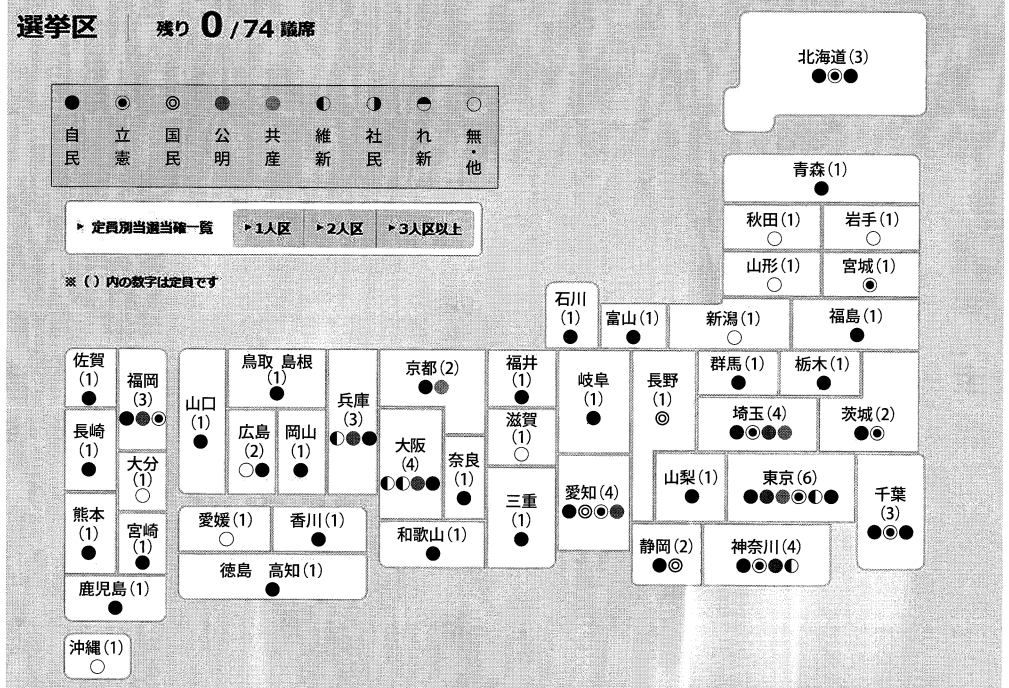
2019参院選選挙区結果 (出典:NHK開票速報)

人区で勝利したことの結果である。2013年と今回の参院選において、野党協力で10以上の1人区を勝ち取ったことは、今後の野党の戦略に大きな教訓となる。

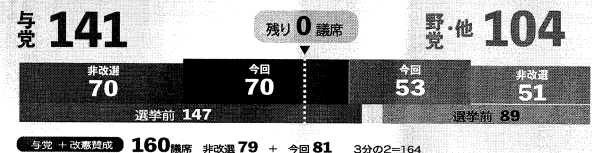
第3は、立憲民主党が結党時の勢いを失い、左右のポピュリスト政党が進出したことである。

立憲民主党は2017年の衆議院選挙の時よりも、比例代表の票を30万票減らした。代わって、結党間もない、れいわ新選組が山本太郎のカリスマ性もあって、200万票余り、2議席を獲得した。また、NHKから国民を守る党が1議席と政党要件を得た。この2つの政党は、政治・経済・社会のエリート、エスタブリッシュメントを、角度は違うがそれぞれ批判して、人気を広げた。世の中の現状に強い不満を持っている人々が、既存の野党以外に受け皿を求め始めたことの意味は軽視すべきではない。山本太郎は小沢一郎と行動を共にした時期もあり、野党陣営の一員として行動することが期待される。山本の動きが大きな政党の形成につながるとは思えないが、既成の野党は彼の問題提起を正面から受け止めて、生活の困難を抱えている人々に対する政策を工夫しなければならない。

以上のテーマについては、座談会の中で政治学者とジャーナリストによる掘り下げが加えられる。ここでは、座談会の後に起きた、枝野立憲民主党代表による国民民主党、社民党、社会保障を考える国民会議に対する統一会派の呼びかけについて触れておきたい。この呼びかけは、党の独自性を尊重し、永田町の合従連衡を否定してきた枝野路線の変更である。



2019参議院選結果 (出典:NHK開票速報)



その理由には、今後の国会運営の中で野党の存在感を示し、政権交代に向けた気運を野党自身にも世論にも盛り上げていきたいという狙いがあると思われる。また、参院選の結果を受けて、安倍政権に代わる選択肢の不在に対する国民の欲求不満が大きいことを思い知らされたことで党勢拡大を第一に追求してきた従来路線を転換するしかないという判断に立ったという面もあるだろう。

国民民主党が枝野の呼びかけにどう答えるか、立憲民主党会派に他の議員が加入するのか、原発をはじめとする基本的な政策のすり合わせをどうするかなど、曲折も予想される。しかし、国民民主党には統一会派を断るとい選択はあり得ないはずである。対立点とされる原発問題にしても、民主党政権時代に作った2030年代ゼロという大目標に向けて具体的手順を考えるという発想で一致点を見出すことはできる。野党の指導者が、参院選で示された民意を受け止め、次の段階に踏み出すことが求められている。■

座談会

参院選総括と今後の展望

柿崎 明二 共同通信編集委員
高橋 純子 朝日新聞編集委員・論説委員
野口 雅弘 成蹊大学教授
山口 二郎 法政大学教授（司会）

なぜ参院選は盛り上がらなかったのか

山口 私が司会を兼ねるということで進めさせていただきます。最初の論点は投票率の低さ、関心の低さだと思います。なぜ投票率が50%を割ったのか、なぜ消費税引き上げとか老後資金2000万円問題とか、生活に密接な争点があるはずなのに、それが盛り上がらなかったというあたり、柿崎さんからいきましょうか。

柿崎 今回特別に下がったのかは別として、野党が不甲斐ない、どうしようもないというイメージが強すぎたのだと思います。結局、現状が変わらないであろうということでの低投票率だったと思います。程度の差こそあれ、これまでと同じ傾向なのではないかと思います。

山口 安倍政権下の国政選挙は、大体52～54%という相場で、それに比べれば4ポイント位の下落ですが、50%を切るというのはちょっとシンボリックな意味があります。自民党としては投票率が低い方が有利という予想で、ことさら盛り上げないという戦略があったんでしょうか。

柿崎 全体的にそう思いました。もう一つ、政治に興味がある人の話ですけれども、あるかないか話題

になった衆参ダブル選がなくなったことで、お祭り気分が抜けちゃったみたいなのがあったのかなというのが永田町的な見方でした。作戦だったんじゃないかという人も居ましたが、さすがに、そこまで考えていなかったと思います。

野口 私は普段マックス・ウェーバーとかの研究をやっているのですが、こんな所で一体何を話せば良いのか、という感じでおります。変なことを言っても許してください。ここ数年、中立性、公平性が報道に強く求められています。そうすると特に地上波のTVでは、政治ニュースは少なくなり、取り上げられてもぼやとしたものが多くなる。争点もよくわからない。これでは盛り上がらない。自民党単独過半数いかどうかとか、改憲勢力2/3がどうかみたいな話をされても、その選挙にコミットする動機づけは弱いものにしかありません。

選挙の前日に、照らし合わせたように吉本の闇営業の件で、芸人の記者会見がありました。なんであのタイミングだったのか、わかりませんが、それでも、これどつちに転んじゃうのだろうなみたいな緊張感、残念ながら今回の参議院選よりもあったと思います。1企業の内輪もめをあそこまで報道し続ける意味がわからないですけど、見ていて面白いと



野口 雅弘 成蹊大学教授

思う人がいるのは理解できます。今回の参議院選を見ていても、ある種のわくわく感とか、どうしても自分で考えてどっちかに入れなければいけないという切迫感みたいなものを持ちにくかったというのは事実ではないでしょうか。

高橋 柿崎さんが言われたことに同意しつつ、あえて違うところを言うと、安倍政権は、参議院選に至るまで予算委員会を開かないとか、きちんと議論をしない。年金の2000万円問題が出てきた時も、報告書を受け取らないということで議論を封じるということになった。低投票率を狙って動いたとは思いませんが、結果的に議論を盛り上げないことによって、何が問われているのかわからない選挙に持ち込んだという面はある。

安倍さんの最後の日の秋葉原の街頭演説も聞きましたけれど、これまでの実績、そして悪夢のような民主党政権がまた戻ってくるよという他の政党の悪口。だから自民党に、というような訴えで。そういう攻めではなくて守りの選挙をやられると、やはり有権者としては、もともと自民党一強といわれる中で、わざわざ投票に行っても意思表示をしても……という気分がつくられてしまったと思います。

山口 私自身今回の選挙は野党協力の旗振りで、応援にも行って街頭演説もしました。今問われているのは主権者の尊厳ですと、市民をアジェンダしようとしてました。森友、加計問題、公文書改ざん、

統計偽装、様々な権力的な犯罪みたいなことが今起こってきて、しかも最高権力者が悪びれるそぶりもなく、そのうち国民は忘れるだろうみたいに国民をなめている。だから我々は主権者の尊厳を思い知らしてやろうではないかと、一生懸命言ったのですが、どうもそういう発想を持っている人は余りいない。棄権というのはその時々多数派に対する白紙委任ですから、自民党、公明党に入れた票プラス棄権をあわせれば、やはり圧倒的な民意は現状肯定であり、政治によって世の中の現状を変えるということについての断念、無力感みたいなものが非常に広く覆っている感じでした。

私はこの結果はある程度予想しては、5月の憲法記念日の朝日新聞の世論調査の数字を見て、これは駄目だなあと感じていました。それによると安倍さんの言葉は信用できないという人が6割、一強政治が良くないと思う人が6割、安倍政治のこれからは期待しない人が6割、だけど政治の安定を望む人が6割、政権交代がおきてほしくない人が5割、この矛盾した民意が持続する限り、選挙に参加して何か変えるという行動は起きないだろうと思ったらその通りになったわけです。

野口さんに是非お聞きしたい、今日お招きした理由は、さっきもちょっと柿崎さんが言った、野党が駄目とか、変えることに対する断念とか、主権者を舐めている政権に対する批判とか、そういった現状を批判し変えていく国民の意欲が、何でこんなに低下しているのだろう。とりわけ若い世代においてということなんですけど。

何故安定を望むのか

野口 自民党が掲げている政策を、若い世代は支持しているわけではありません。例えばLGBT、同性婚とか、今の大学生は基本的にかなり寛容です。むしろ「日本の伝統的家族制度」とか言われるとドン引きですよ。憲法改正に関しても、議論くらいはした方が良いという人は多いと思いますが、積極的な改憲派は、僕が見ている範囲の学生ではそんなに多くはありません。要するに、安倍さんが掲げてい

る政策を支持していないが、なぜか投票行動になると、自民党に入れるという人たちが今の政権を支えているわけです。

政策を選んで政府を支持しているわけではなく、そうしたものは関係ないところで安定を選んでいくというのは、山口先生がおっしゃる通りだと思います。それを僕らはどう考えたら良いのか、本当に難しい。いくら政策の話をしたり、山口先生がアジェンションしても、それが入っていかない。

去年『現代ビジネス』というウェブ・ジャーナルで、「『コミュカ重視』の若者はこうして『野党ざらい』になっていく」というエッセーを書きました。若い人というのは、批判をされるとか抵抗をされるとか、そういうものに対するアレルギーがすごく強いので、野党的な振るまいをする時点で、引かれてしまうというようなことを指摘しました。

学生に対しては、野党に批判しちゃいけないと言ったら、ボクサーに殴るなどと言うようなものなので、それはちょっとおかしくないかという話をしています。そして野党関係者には、正論を言って対決し、相手を論破するよりも、もっと何か共感を広げるような話し方とか、コミュニケーションの取り方を工夫しないと、どうもうまくいかないのではないかと話しています。そうでないと、山口さんが頑張れば頑張るほど、なんかこう若い有権者に逃げられるというか、おかしいことになってしまう。

山口 それは自分でも感じます。応援に行って街頭に立っても、票は増えないと感じました。最後の金曜日に横浜に行って、神奈川の議席を共産党と松沢で争っていたので、共産党のてこ入れて、前川喜平元文科次官と二人で共産党の応援をしたんですね。それで、わざわざ聴きに來る人は盛り上がるけれど、圧倒的多数はただ側を通って行くだけの傍観者です。だから、何というのか届かないというのは私も実感しています。

学者二人の嘆き節についてジャーナリズムの方からコメントをいただきたいと思います。まず、柿崎さん。

柿崎 僕は構図が変わればあつという間に状況も変わってしまうと感じています。例えば小池百合子



柿崎 明二 共同通信編集委員

ブーム、立憲民主党(以下、立憲)結党時の枝野幸男待望論、そして今回の山本太郎さん。態様は違うんですけど、既成政党にたった1人で立ち上がるみたいな非常に似ている構図がある。

普段は政治家の話に聞く耳を持っていないのに、その構図にはまると急に持ち始めて、崩れるとまた持たなくなる。さらには相手を攻撃するというより、小さくても自分たちのために奮闘している姿。今回の山本太郎さんも、政権与党を批判するというより、みんな生きてくれよと共感を呼び覚ました。その上で矛盾を批判する。そして解決策として消費税を廃止すると断言する。

整理すると、大きなものに小さなものが虐げられながらも奮闘する、ということに反応する。昔ながらの判官贔屓かもしれません。政権批判だけというやり方にはあまり反応しない。

朝日新聞でトルコの野党の記事があつて、強権で分断をあおるエルドアン大統領に対して「過剰な愛」を叫ぶ野党が出てきて勝っていると。山本太郎さんの「生きててくれよ」という呼びかけはそれに近いのかもしれません。有権者に対する共感、彼らが抱える具体的な不条理の指摘、解決策みたいなものが合わさると、有権者もガラッと変わってしまう気がします。

それから野党の問題でいうといろいろな人と話している感じでは、民主党政権時代のことだけを嫌っ



高橋 純子 朝日新聞編集委員・論説委員

ている人はもうそんなにいなくて、野党に転落した後の動きが新たな失望を招いていると感じます。国民民主党(以下、国民民主)を例にとると、小池百合子さんの調子が良いとそっちに行くと、立憲の調子が良いと小池さんを切って、そっちと一緒にしようとする。そして山本さん率いる「れいわ新選組」(以下、「れいわ」)の調子が良いと見るや、一緒にやろうとなる。揚げ句の果てに「生まれ変わった」と安倍晋三首相と改憲もやるみたいなの。

さかのぼりますが民主党から民進党に名前を変えたのも同じです。党勢が低迷したのは名前のせいじゃなくて自分たちのせいなのに。名前を変える先にその後の混乱があった。こうした振る舞いが民主党政権時代を想起させる以上にあきれられたのではないかと思います。

山口 安倍さんが「民主党の枝野」と当てこすりを言うのは、それなりに効き目があるということですか。

柿崎 効き目はありますけれど、それ以上に自分たちに要因があると認識しないとイケません。安倍さんの当てこすりがあるうがなかりうが同じなのではないかと思います。有権者が聞く耳を持たせるといふ具体的イメージはわかりませんが、何かの拍子にまた変わる、無責任な言い方ですけど可能性はあるので、諦める必要はないという気がします。

高橋 届かないという意味では新聞も同じで、いく

ら安倍政権の問題点や議会制民主主義がゆがめられているということを書いても、「サークル」の内側、つまり、もともとそう感じている人にしか届いていない気がして、無力感にさいなまれてしまうところは山口さんと同じです。政治やジャーナリズムに対する信頼度は確実に下がっていると思います。

山口 それはインテリ知識人に対する信頼度の低下ともろに表裏一体ですね。

高橋 そうですね。「安倍一強」と言われる状況がなかなか揺らがないことへのいら立ちが、マスコミ不信、マスコミ批判につながっている面があると感じます。反省すべき点は多々あり、何とか信頼回復を果たさなければと思いますが、政権と市民に「挟撃」される現状の中では、なかなか出口が見えてきません。

ただ一方で、若い人たちは全く政治的に関心がないかという、私はそうではないんじゃないと思っています。選挙期間中、朝日新聞の夕刊に埼玉大学の松本正生教授のコメントが掲載されていて、なるほどその通りだと思ったのですが、「若者は、選挙に『正解』があると思っているのでは」と。

関心がないわけじゃないけれど、「正解」を探して、結果的に投票先を決めきれず棄権してしまう。あるいは、現に「政権与党である」ことが自民党への投票理由であったりと、「正解探し」をしているという感じを受けます。

先日、政治に興味があり、ネット上に記事を書くなどしている現役の大学生と話をしたのですが、そんな彼でも、どういう人物かよくわからないままに一票を投じることが無責任だと思うから、怖くて一票を投じられない、将来その政治家が不祥事を起こすなどしてだまされるのがイヤだから、投票するということに対して尻込みしてしまうと言っていました。今、学校現場で、主権者教育を一生懸命やっていますが、山口さんがおっしゃるような意味での主権者、私たちはこの国の進む道を決める主権者なんだということを自覚させるような教育ではなくて、政策の違いを認識して一票を投じましょうとか、テクニカルなことばかり教えている。それでは「賢い消費者」になりましょうというのとあまり変わらない。

消費者と主権者は違うんだということを教えるべきなのに、まさに消費者としての振るまいばかり教えている感じがします。

山口 確かに消費者だったらまがい物を掴まれたらイヤだなと思いますよね。

高橋 それで自己責任だみたいになっちゃっているとか、自分が選んだ政党や候補者が間違っただけをしたら、それを叱咤して育てていくのも主権者の役目ですが、「正解」を選ぶのが選挙だとあまりにも思わせられている面がある。そこにどうやって風穴を開けて、政治本来の豊かさや可能性を取り戻すかがいま問われていて、そのための言葉を私たちが見つけていけないといけないのですが、たとえば社説だとどうしても、「政策を磨け」というような結論になってしまう。もちろん政策は大事ですが、でも政策を野党が一生懸命磨いても、かつて「マニフェスト選挙」が盛り上がった時を除いては、有権者はほとんど吟味していないですね。

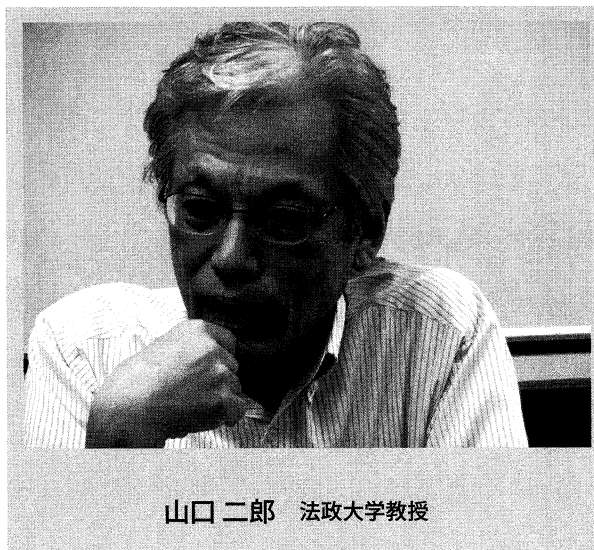
山口 政策の議論は決定的なハンディキャップがあるから、あまり野党に政策を求めてもしょうがないと思う。権力がないのだから野党の政策は所詮作文です。作文でどんなに美しいこととか整合性のあることを書いても、これは絵に描いた餅です。

高橋 政策を磨け磨けと言って、既存の野党が行き詰まっている一方、「れいわ」の山本太郎さんのような、掲げる政策はかなり粗削りだけれども、強烈な「メッセージ」を発する人物が登場し、人気を博しています。

政治的教育・主権者教育

山口 政党の出来不出来、あるいは可能性についてはちょっと後にして、今高橋さんが出した政治的教育という問題は、野口さん何かお考えはありますか？

野口 僕の弟は中学校の社会科の教師をやっているのですが、正月とかに学校の話をすることがあります。メディアも政治的中立性をめぐって大変ですけど、学校の先生も大変です。何を話してもクレームがきますから、政治的な話はなかなかできない。そ



山口 二郎 法政大学教授

うするとどうなるかということ、サッカーのルールは教えるけど、サッカーのプレイの仕方は全く教えないということになるわけです。選挙制度はこうなっています。定数はこうです。もちろん、そうした知識も必要です。でもそれだけでは、選挙のときに何をどのように考え、投票したらよいのかという肝心なことがわからないままです。高橋さんがおっしゃっていた通り、選ぶというのには正解はないですよ。何が正しいかわからないけれども自分なりに考えて悩んで、他の人と議論して、選んでいく必要がある。政治的な判断能力というのは、そういう経験のなかで培われていく。しかし今の学校では、そういう機会が奪われてしまっている。

今回の選挙でも割と意識高い学生さんが、SNSで流していたのは、みんなで投票に行きましょうというものでした。誰からも批判を受けない正論です。ところが、どこの政党ににどのような理由で入れるということについては、まず公言しない。そういう党派的なことを言うとハブられる、とある学生は言っていました。こんなような政治カルチャーは、あまりにひどすぎる。ドイツとかであれば、学校の先生が、例えば、自分は緑の党の支持者であると言う。もちろん、みなさんは他の党を応援しても良いし、いろいろな人がいて、正解が何かはわからない。こうしたことを確認したうえで、じゃあこの問題についてどう思うか、みんなで議論してみようとなる。日本の教育現

場では、「中立性」の原則の縛りが強すぎて、党派的な議論をすることが難しく、その傾向はますますひどくなっていると思います。

選挙と報道

山口 メディアの問題をここでふれておきたいのですが、投票率が低下した理由の一つにTVが全然取り上げないからだという批判が結構ネットにはありますが、どうでしょうか、柿崎さん。当事者として振り返って、メディアのカバーの仕方ってやはり変わってきていますか？

柿崎 今回本当になかったですね。聞くと簡単です。視聴率が取れない、以上です。さっきの話に戻るんですけど、現状変わらないだろう、だから面白くない。本当はこの現状変わらないだろうという前提の中に自分の行動があるということが棚上げされていることが、すごく問題なんです。

山口 だから自己充足的予見というやつですよ。

柿崎 予言の自己成就ですね。1995年の参院選はもっと低かったですよね。

山口 95年というのは村山内閣の時で、自民党と社会党で組む、これは何だということで、みんな政治に対して当惑したという状況でしたね。あの時は。

柿崎 野党側に思いを託す先がなかったということだとすると、今回も形は違いますけれど、同じことだっということになってしまいますよね。

高橋さん、選挙と報道についてはなにかありますか。

高橋 何を言っても言い訳に聞こえると思いますが、一応言っておくと、「中立公平」であるべく、選挙報道には非常に気を遣います。「れいわ」について、大変なムーブメントだったのにほとんど報じなかったじゃないかと言われますが、選挙期間中の「特別扱い」はやはりなかなか難しい。今後の課題です。また、やはりメディア、特に放送法の縛りがあるTVは、「中立公平」をちょっとでも逸脱するとすぐに文句が来る。政治家本人も、品位のない振るまいといいますか、公職に有る者として批判は甘んじて受けるということではなくて、すぐに事実誤認だ、発言を切

り取られたと言ってメディア批判を繰り返す。実際、自民党は在京キー局に、中立公正な報道を「お願い」するというかたちで、実質的な圧力をかけたことがあります。

そうなると、政治を報じるのは面倒くさいという気分が生まれかねない。視聴率がとれない割に手間がかかる。批判を受けるリスクは高いとなると、もうやらない方がよいよねとなってしまう面があるのではないかと。だから今、本当にメディア全体が踏ん張らないと、このままずるずると後退させられることになるのではないかと、強い危惧を抱いています。

野党の結果をどう評価するか？

山口 では次の問題は、野党の取り組みあるいは成績について少し話をしたいと思います。立憲が一応議席を増やしましたが、比例では、2017年の衆議院の比例票から300万減らしている。国民民主に至っては、比例で3しかとれないということで、旧民主党、民進党系の野党のできはあまり良くなかったと思うのですが、この点についてまず柿崎さんから分析をお願いします。

柿崎 さっきの話をもっと詳しく言いますと、立憲の調子が良かった初期段階、国民民主と一緒にやりましょうと、記者会見でさかんに言っていましたけれど、事前の作業がなかった。生煮えどころか煮え始めてもない段階で、記者会見で言われてしまうと立憲側も防御的に否定せざるを得なくなる。

僕から見ると、旧民主の一番悪いところ、事前の準備、水面下での環境整備など全くないまま記者会見でいきなり高い目標をぶち上げちゃう、「記者会見病」が出ていたのではないかと映ります。自民と公明に学ぶべきところがあると思う。政策の善し悪しは別として、ともかく事前の水面下での作業を進めた上で記者会見するみたいなことです。

はっきり言って政治のイロハのイなんですけど、それが無いから全てがスカスカ、ぶち上げた後は大混乱の繰り返しで、言ってるだけに見えちゃうんです。自公の方がましに見えるという構図になっ

ている感じがします。「私に任せては駄目ですよ」という暗黙の、だけど明確なメッセージをずっと自分を出している感じですね。

野口 いきなりですが、カール・シュミットの話をちょっとだけしても良いですか。カール・シュミットの『合法性と正当性 [レジティマシー]』という本で、政権与党は圧倒的な政治プレミアムがあると論じています。翻訳では、政治的「余得」と訳されています。わかりやすく言えば、頑張った人に予算をつけるとかポストを配分するとか、街頭演説の時にどのくらいヤジを排除するとかしないとか、そうした権力資源を政権与党は手にするということです。首相の解散権をこれに含んでもいいでしょう。この政治的プレミアムを使って、ワイマール時代、ナチが政権とったら面倒くさいやつを排除した。そしてシュミットも議会制に見切りをつけたわけです。

議会制にレジティマシーがあるとしたら、ちゃんと言論についてのフェアな競争が行われて、私たちがその競争を見て判断できるというところでそれは初めて成立します。

野党がだらしないというのは簡単ですけど、政治的な主張をめぐるフェアな競争がしずらくなっているという点にもっと注目すべきだと思います。英国で行われているような、野党だけに公金を配分する「ショート・マネー」や、その日の議題は野党が設定することができる「野党日」など、野党に対するアフーマティブ・アクションも検討されるべきです。もちろんプレーヤーとしての野党の枝野さん、玉木さんらは、この状況で、今ある戦力のなかで、どのように勝つかを考え、努力しなければならない。ただ、私のような立場の人間としては、論争が行われる土俵が、圧倒的にアンフェアになっているということを問題にしたい。

山口 確かに高橋さんも指摘したけれど、予算成立した後は全く予算委員会が開かれなくて、論戦というものがなかったし、例の金融審議会の部会の報告にしても、受け取らないとかで議論がうやむやになった。そういう意味では、与党が主導して選挙に向けた政党間の議論を意図的にしなかった。

野口 議論をしなければやはり圧倒的に与党有利

になります。政治的中立性を強調して議論が盛り上がりなければ、政権側、持っている側が有利なんです。その構図を何とかしないと、フェアな競争にはなりません。

山口 大きな課題なんですけど。

柿崎 これは鶏と卵になっちゃうかもしれないんですが、野党が、事前の水面下での作業ある程度できるようになって、同じことを繰り返さないとなったら、アンフェアだというところに気づかせることが出来るかもしれない。今のところどちらかというと、ドタバタし続ける野党の方に問題があって、アンフェアさが覆い隠されてしまっている感じがするんですよ。

いつまでもこのまま続かないと願っていますし、そう思っています。また楽観的になりますが、今がひどすぎるので、回復しやすいのではないかとも思います。

野党共闘の評価

高橋 みなさんと同じですけど、一方で小選挙区で10勝ったというのはあまり過小評価すべきではない。ちゃんと女性候補が出て、これまで「私たちの声が代表されていない」と政治をあきらめていたような層に、言葉なり、イメージで、この人なら私たちの声を代表してくれるかもしれない、一票を託してみようと思わせることができた。そういう可能性はあるということは今回見えたと思うんですね。

野党が自民党とどこで差異化を図るかということ、もちろん政策を磨くということもゼロとは言いませんが、やはり女性や障害者、性的マイノリティーの方々の声を対弁する、多様性を体現していくということは重要なことです。自民党ははっきり言ってその点をサボっているんで、そこで票を掘り起こしていくという可能性がこの10の戦いから垣間見えた。現職の与党議員に勝つというのは大変なことです。そういう可能性もきちんと見て、大事に育てていかなければいけないと思います。

山口 あと、野党協力で、1人区で10勝って改憲勢力2/3を阻止し、自民党過半数割れに追い込んだ。これは結構大きな意味があるのではないかと

思います。選挙の結果についての総評が、与党過半数維持勝利みたいな話がすごく多くて、なんでみんな自民党が勝ったと思うのかなと不思議に思うんですが、柿崎さんどうですか、その辺の報じ方というのは。

柿崎 一橋大教授の中北浩爾さんが新著『自公政権とは何か』などで指摘していることに近くなるのですが、衆院は小選挙区と比例代表の並立制度なので二大政党ではなく二大政党ブロックになると考えると、自公は20年前からブロックだが、現在の野党は1回もブロック化していない。ブロック対ブロック未満となると、結局負けてしまう。

次はいつあってもおかしくない衆院選ですので、早めに準備を始めなければならない。立憲の枝野代表が衆院で統一会派を国民民主などに呼びかけたのはそのスタートだと思います。ただ、「れいわ」を視野に入れると消費税の問題が出てくる。存続前提の立憲などと廃止の「れいわ」とどう折り合いつけるのか。

みんな口先だけの連携を言って、消費税の問題を後回しという風になってしまうと、縮小再生産になる危険性があります。真正面から向き合って政策調整に望めば、生み出されるものがあるのではないかという感じがします。

山口 私自身は3年前から、今回野党共闘で1人区の本一化で実践的な活動をしてきました。それについての総括を一言言えば、これって結局55年体制への回帰だなあとやや自嘲的に自分でも思います。改憲阻止のために1/3を確保するというのはそれなりに意味があると思いますが、この1/3という峰を登りつめたら、その後の発展性がないんですね。1/2という峰と1/3という峰は全然違う峰でして、1/2の峰を登ろうと思ったら、1/3の峰を1回降りなければいけないという問題があるんです。

だから今とりあえず旧民主党、民進党系と共産党、社民党、全部かき集めてやっと1/3取れた。私の思いとしては、受け皿とか、野党共闘だとか言って5野党会派をかき集めて、ある種のブロックをつくろうとしたんですが、国民から見るとこれ全然ブロックにはなっていないということでしょうか。野口

さんは野党協力について何か感想有りますか？

野口 今の選挙制度を前提にするとまとまらざるを得ないのはわかりますが、去年成蹊大学の文化祭に枝野さんが来て、希望の党の時みたいにくつつこうとすると、何をしたいか意味がわからなくなっちゃうから、筋を通して、この路線で行った方が良く自分は確信しているという話をずっとしていました。その延長線上に今回がある。

選挙制度で、もし例えばドイツみたいに比例代表制であれば、そんなに今の日本の政党の数と大きさとまとまりは悪くはないと思います。ただそれを、小選挙区を基本にした選挙制度でなんとかしようとするから、必ず共産党はどうするというような問題が出てきてしまう。野党共闘の話は、選挙制度の見直しも視野に入れて、行われるべきだと思います。

山本太郎と「れいわ」

山口 やっぱ山本太郎さん、「れいわ」の台頭は大きな意味があると思うんだけど、山本太郎がなぜこんな短期間でお金を集めて230万票くらいかな、取れたのか。これはいかがでしょうか。柿崎さん。

柿崎 一つ山本太郎とN国党、自民党の山田太郎に共通しているんですが、ネットのどぶ板活動って効果があるんだなと思いました。投票率が上がって、ネットどぶ板選挙の人たちが伸びたというのならわかるのですが、投票率が下がって、固定票が高まる中で、効いたというのは、すごいことなのかもしれない。

それは立憲がやりきれていないところです。遡ると安保法制に反対したシールズがあり、それを一生懸命研究したのは実は自民党だった。野党は今ひとつピンときていなかったんですが、今も同じなのではないかと感じます。もうちょっと綺麗に、ネット選挙をやっていた。ネットどぶ板選挙の場合、政策じゃなくて拡散などの運動の仕方が前面に押し出されている。「れいわ」も同じですけど、どうすれば拡散できるかという手法が書いてあるんです。あの誘導といいますか誘引というのは、今までやってい

ないところでも野党の中でできるところがあるのかもしれない。

それから、「れいわ」でもう一つ、ユーチューブで山本太郎さんや「れいわ」を見ると関連動画で過去の国会での質問の様子が出てくるんです。それをついで見ていくと、結構同じ姿勢で質問している。首尾一貫性があるんです。その時見ていなくてもこいつずっとこうなんだなと思わせる。首尾一貫性というのは信頼感に直結する。

かつて小泉純一郎首相がそうでした。彼は自民党の支持団体と敵対することになる郵政民営化を党内の反発を受けても言い続けていた。郵政大臣の時にも言って物議をかもした。それが、みんな潜在意識の中にすり込まれていたもので信頼された。

「れいわ」で、もう一つ。自分は東京選挙区ではなく比例代表で立候補して特例枠は重い障害者の方々のために使った。今回、2議席で本人が落ちたから失敗であるかのような見方がありますが、私からすればベスト、200点満点じゃないですか。本人が届かなかったということで支持者の間に次は当選させるというマグマがたまった。今回、当選していたらある種のガス抜きになっていたかもしれない。結果的に絶妙な出来です。普通は逆で、自らの当選を最優先するが、それを捨てた。政治の世界にまず見られない自己犠牲です。

逆のことは希望の党で起きた。小池百合子さんは「排除」発言で挫折したという見方が固まっていますが、私はそうではなくてあの後、小池さんが身を差し出すことができなかった、具体的に言うと立候補しなかった。仮に安倍首相の選挙区から出れば、本人は落ちましたが、自らを挑戦者に位置付け直すことができた。希望の党は100議席以上獲得できたと思うんです。それを山本さんは規模は小さいがやってみせた。

山口 まあ並の職業政治家ではないということですね。野口さんに伺いたいのは、ヨーロッパにおける左派ポピュリズムの動きと比べてみて、今回の山本太郎の動きというのは同じようなものとして理解できるのでしょうか？

野口 理解して良いと思いますね。特に、若い層に

奨学金をチャラにするという話は、今どこでも若年層は学資ローンに関しては困っているの、アメリカもそうですけど、響くんだと思います。そういう政策の打ち出しとか、ネットを使ったやり方とか、そういうのはヨーロッパの左派ポピュリズムとすごく似ています。今までなぜ日本では左派ポピュリズムが出てないのかという疑問がありました。出て来るべくして出て来たと言えると思います。

もちろん左派ポピュリズムについては、危惧を持つ人も多いかも知れません。どう評価するか、この中でも議論が分かれるところだと思います。ただ、2議席獲得はすごいことですが、それでも2議席です。今この段階では、いろいろ心配をする必要は全くない。むしろそれによって議論の窓口が広がったことを評価し、議論が活性化して行くことに期待する。そういう段階だと思います。

山口 山本太郎の演説はすごくて、各地でものすごい熱狂を生み出したようですが、高橋さん、山本太郎さんに期待を託す人びとについてはどういう見方をしていますか？

高橋 やはり政治に期待していない、自己責任みたくなものを自分の中にすり込んで、政治に対する期待が低い人に届いているという印象です。一つの政治の可能性というか。一方で自民党なんかはテクニカルなやり方ですよ。要するに票を取ることに対して非常にテクニカルになっている。

政治って本当は言葉であったり、体温であったりする。そういう政治本来のパワーみたいなものを、計算なのか本能なのかわかりませんが、彼が体現して見せたというところがすごく大きい。枝野さんの演説を聴いても、失礼ながら体温が感じられないとか、立憲を立ち上げた当初は感じられましたが、やはり今は、物語性を失っている。

やはり政治においては、原初的な人間のパワーとか、情熱のこもった演説の力というのは馬鹿にしたもんじゃないんだと思います。そういうものが、新聞とかネットとかTVは見ないけれども、街頭で前を通りすぎるつもりがつい立ち止まって聞いてしまったと。それがこれだけ広がりを持つというのは一つの可能性じゃないかなと思います。

現実的か現実的ではないか

山口 山本太郎さんの政策って、消費税をゼロにするとか、奨学金徳政令とか、かなり、ある意味できるかどかわからない。あるいは荒唐無稽みたいな響きもあるけれども、むしろそういう主張を今ぶつけないと、人びとは覚醒しないと言うことなんですか？野口さんどう思います。

野口 高橋さんが、模範解答というか正解を求める傾向があるとおっしゃっていましたが、それによって政治が閉塞していることを、もっと真剣に考えるべきです。政策を磨いて一番良い最適解を求めるというのではなくて、僕たちに多分今必要なのは、将来、どのような社会にするのかというビジョンの水準で、複数の選択肢をつくることです。そしてそのうえで選択することです。皆が現実的に考えて、消費税8%にしますか、10%にしますか、どっちがいいですかと言われても、8か10かではテクニカルな話に終始してしまう。

消費税をゼロにしたらどうなって、20にしたらどうなるかという方向性をめぐる大きな選択肢が与えられたら、やはり人間はより真剣に考えるようになります。今年大学のゼミで、カール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』を読みました。学生の反応はすごく悪かった。彼らはイデオロギーという言葉が使われなくなった後の世代です。

ポストイデオロギー世代の彼らは、現実的か現実的でないかという2項対立で考える。だから安倍さんの、前に行くか悪夢の時代に戻るかという、単線的な論法は、かなり自然に受け入れられるんだと思います。

ただ、政治の議論というのはいくつか可能性があって、それらを比較することで成り立ちます。昔はそのいくつかの可能性を、こういうイデオロギーとこういうイデオロギーがあってあなたはどれに近いのですかという思考をしていたのが、それがなくなった。「あれか、これか」という選択肢ではなく、現実的かどうかという話になっている。もう1回選択肢をしつかりつくらなければならない。その時には多少は極論も必要です。

最終的には他の党派との間で、現実的な妥協はあるでしょう。それでも、ある程度明確な旗を立てて選択肢を示すというのはすごく大事なことです。枝野さんはとても真面目で、ちゃんとした人だから、消費税ゼロとは言えなかった。でも政治的な方向性を示す点ではやっぱりちょっと物足りないという気がします。

柿崎 僕は彼とその話をしたことがないですが、やはり民主党政権当初の、鳩山由紀夫首相のあの「最低でも県外」発言に戻ってしまうのではないかと。あの反省、反動で「実現可能性」を考えてしまうと、やっぱり消費税廃止と自分たちが言うのと、あれと同じになってしまうんじゃないかと思ってしまうのでは。

野口 民主党政権が決められない政治だというのが一番象徴的なのが、「最低でも県外」だと思えますけど、あれってそこまで悪いことですか？今までそんなことは議論する可能性すら封印されていたものを、ちょっと議論してみましようよ、私は最低でも県外だと思えます、と議論を拓いたことすらも失敗だったということでしょうか。

柿崎 「最低でも県外」はいいんです。でも、やるならちゃんと事前に準備、環境整備をして、打ち上げたら最後までやりきらなければ駄目だった。もっと言うと1割以上の可能性で、できたと思う。現実性はある話だったんです。それが結局、発言しちゃった後で官房長官に指示するみたいな、記者会見なんですけど、そうってしまった。こうなると底が抜けて、可能性そのものがつぶれた。政治は結果に責任を負わなければならない。責任倫理ですね。たぶん、みんなそこを思い出してしまうんだと思います。

山口 本題から外れるけれど、アメリカにボールを投げられれば必ず何らかの反応をしたはず。ボールを投げる前によってたかって鳩山を羽交い締めにして、投げさせなかったわけです。官僚やメディアも。柿崎 政権交代後の改革はある種の戦いです。準備ないまま戦って、結局大敗北を喫してしまうというのが、民主党政権のイメージなので、そこを払拭しきれていない、努力もしていないというのが、熱が

無くなっちゃった要因なのかなと思います。

高橋 そこは難しいですね。私は野口さんの意見に賛成で、やはり現実的か現実的でないかという選択ではつまらないじゃないですか。それに現実というものは結局、与党が握っている。実際に予算をつけて現実をつくっていくわけですから。そんな現実の枠内での細かな違いを見分けて選択しろと言われても、関心が薄れて、投票率が下がるのは当たり前だと思うんです。

野党の役割は、もちろん政策を磨く、現実的な政策を出すということもおそろかにすべきではありませんが、可能性を示すというか、可能性の幅を広げてみせるということも重要だと思います。私たちはこっちにも行けるんだよ、と。今は不可能に思えることでも、誰かが口にするればそれは可能になるかもしれないわけで、「現実」の前にひれ伏すばかりではだめだと思います。民主党の失敗によってあまりにも萎縮してしまっていて、やはり遠う将来の希望や夢を見させられなくなっているというのは、野党としてはちょっときつところだなと思います。

柿崎 立憲はまだ人がいないので、大きなことでは準備だとか水面下工作だとかできない。昔の民主党だったら、もしかしたら地道にやっていたらできたかもしれないですが。

山口 一見無理だと思えるような大きな理想を掲げてある種の人びとの熱を喚起しつつ、ある程度意味のある改革に着地させるみたいなかなか高度な政治術が必要ですが。

高橋 その通りではありますが、なかなか難しいですね、そこは。現時点では。

柿崎 なぜできないかは大きな謎です。数十年前に地方の市政や県政を見て、これが政治なのかと当時は思った。今思えばたいしたことないんです。根回しとか貸し借りとかそういった程度のことですから、理念もへったくれもない。今、国政でなぜかそれができない。私の抱え続ける疑問です。

組織政党は衰弱しているか

山口 政党のいろいろな成績を見る中で、公明党

と共産党が比例でかなり票を減らしている。投票率が低い時は組織政党が有利という定説がありましたが、今回は共産党についてそれは当てはまらなかった。公明党は踏ん張って、選挙区全員当選という結果ではありましたが、組織政党の衰弱というのは実際にあるのでしょうか？柿崎さんどう思いますか？

柿崎 実は選挙前に公明党と共産党についてコラムに書いていて、衰退が見えてきたら多分変わらざるを得なくなるであろうという結論。公明党については、「衆議院から撤退し、参院だけの政党になる」という公明党を連立に引き込んだ野中広務官房長官の見方を紹介しました。

共産は党名や綱領を変えるのだという共産との選挙協力を進めようとするときの民進党幹部の話を引用しました。

公明はやはり創価学会に不満がたまってきたのではないかな。一つは沖縄県知事選。玉城デニー知事に30%が流れた。今後、何かきっかけがあれば、たとえば憲法改正が本格化するなどすれば、同様のことが広がるのではないかな。3割ということはないと思いますが。

共産も立憲や「れいわ」に票を奪われていますよね。というか一時、共産に移っていた票がまた戻ったというかな。

立憲の枝野代表が、共産との間に市民連合を挟もうとすることにこだわるのは、ひとつは公明・創価学会向けでしょう。ぎりぎり直接は組んでいないというメッセージでしょう。

なぜ、そうするかというと今のままの自公ブロックを相手にしては勝てないと思っているからでしょう。公明というよりも選挙の実動部隊である創価学会に、離反してはもらわなくていいけど、少し、自民への支援を弱めてもらえないか、ということ。これだけでも野党にしたらチャンスです。

自民党の衆院1～3回生は約40%いますが、創価学会の支援が受けられなくなったらばたばた落ちますよ。今回の参院選でも自民党内では候補者に問題があるところは落ちているという総括になっている。意外と正しく淘汰されているといことになり

ますが。

実は個別的には起きていることで、2017年の衆院選でも創価学会が野党候補を支援している選挙区を複数確認しています。ただ、一つ共通しているのは野党候補が非常にしっかりしていて、しっかりした後援者名簿を提供できること。やはり現世利益の世界ですが、そこに憲法改正など党としての存在意義に関わる問題がかぶさってくれば変化は見込めるでしょう。

N国党をどう見るか

山口 自民党安倍政権の今後というのはまた後でいろいろ議論するとして、もう一つ今回の結果で、N国党はあんまり軽く見ちゃいけない問題なんじゃないかという気がしています。あの政見放送はめちゃくちゃだったし、まともな政策もちろん無いし、あそこの候補者には在特会と関わった人もいて自由民主主義の枠外でめちゃくちゃな政治運動をやっていた人びとですよ。これが議席をとってしまった。

1920年代のドイツのヒトラーの登場の時期と重ねるのはちょっと飛躍でしょうけれど、こういう荒唐無稽というか、本当にめちゃくちゃなシングルイシュー政党が出てきて、それが100万単位の得票をするというのは、大丈夫かなというか日本の政治の底が抜けた気分もあるんですが、野口さんどう思います？

野口 1920年代のドイツと今の日本政治を比べるというのは、あまりにベタなので、研究者としてはやりにくい話ですが、それでもそういう対比をしたくなる今日この頃ではあります。それにしてもN国をどう捉えたら良いのか、本当にすいません。わかりません。

山口 高橋さんどう思います？

高橋 考えたくないというか。

山口 そうなんです。考えたくないからのさぼるんですよ。批判すると後で面倒くさいことが起こるからみたいな。

高橋 そうですね。維新を除名された丸山穂高氏を入党させたり、暴行問題の渦中にある石崎徹氏

も自民党をはずされたら是非うちに、みたいなことを言ったり。それでも政党として助成金を受け取り、一定の機能はするわけです。私たちが大事にしてきたはずの議会制民主主義とか代表制というのが、何というか、底が抜けたというか、じわじわと侵食されているような気がします。

既成政党に対する私たちの飽きとか、自分たちは誰にも代表されていないという不満とか、政治家なんて威張りくさって何なんだという嫌悪感とかがベースにあり、それに比べたらなんかやってくれそうだとか、面白いことが起きそうだとか、そういうことで選ばれている面があると思います。これはやはり既成政党の側が、本当はもっと深刻に受け止めなければいけないと思います。

山口 この間佐藤優さんと朝日カルチャーセンターで対談したんですが、その中で佐藤さんは、N国党の言うNHKというのは放送局のNHKだけではなくて、エスタブリッシュメント全体のシンボルだつていう言い方をしていました。要するに政治経済、あるいは文化の世界で建前を言っている人たちを全てぶっ飛ばしたいみたいな、破壊的願望みたいなものを吸収したというのが、佐藤さんの見立てなんです。

ただ、建前とかルールとか規範とかというのを全部壊すとやっぱりこれはちょっと困ります。民主政治にとっては非常に危惧すべき問題かなという気もする。そんな政党というのが今なんとなくそれなりの居場所を持ちそうなのがいやですね。

高橋 N国党と「れいわ」というのは分けて、私は分けて考えたいと思いますけど、同根の部分はまったく異なるのかどうか。

柿崎 言えないと思います。同根の部分はありますよ。

高橋 ありますよね。それをどう腑分けして見ていったら良いのか。

山口 だから、左派ポピュリズムの持っている、それこそ大衆の熱気とかある種の正義感みたいなものをどう経路をつくって導いていくかということ。これは既成政党の側の責任ですよ。

野口 左派ポピュリズムは典型的にエスタブリッ

シュメントに対する反逆ですから、そういう意味ではN国党とつながっているというのは否定できない。

柿崎 何が共通しているかというネットの有権者、特に若い人への接触度合いが高い、つまりどぶ板です。接触度合いが高ければ高いほど、拒否と賛同が比例して多くなる。ネットでもかく大量に、量でやるか技術でやるかは別として、というのが出てきているのではないかと思います。実は自民党の支持が若手で高いという要因の一つはそこだと思います。だから立憲は逆にはまだ伸びる余地が、大本を変えなくてもそれだけで伸びる余地があると思います。

野口 でもそれをもっともついろいろな政党がやり始めていいの。相当醜悪な選挙になりますよね。

柿崎 なりますね。あとさらにその中でもまた優劣が出てくる。ネットの特性からして多分、醜悪の方が勝つでしょう。

野口 なんかもうつらいな。

柿崎 これから公開のイタリア映画「帰ってきたムッソリーニ」の予告編の中で、あるおばあちゃんが、ムッソリーニのことを「私は忘れない。この悪党を当時も人は笑っていた」と指摘、「笑っていると征服される」というキャッチコピーが続きます。本当に笑っている場合じゃなくなってきたかもしれません。

山口 そう、最初みんな笑っていたんだけど、正面から取り上げるとかあるいは批判をすると、極めて面倒くさいことが起こるから、なんとなくじわじわ拡がっていくという。

柿崎 それで政権とってしまったら今度は圧倒的に優位になってしまうんで。

山口 だから、狼がきたと別に今言う必要はないし、それはあたっていないとは思いますが、何か従来の選挙とか代表制民主主義というものの観念が、ネットがここまで大きな媒体になることによって変化し始めたというのは、今回の参議院選挙で非常に大きな特徴なのかもしれませんね。

柿崎 その時期が参議院選と重なっちゃったというのが大きいと思います。つまり、全国を対象にし

た大きな比例代表は小さい声を拾うための制度です。日本では比例代表はこれまでは少数意見を吸い上げる良い制度みたいな見方がありますが、システムは善悪、価値あるなしは問わないのでとんでもないものも拾ってしまう可能性があるということです。

これからの政治と課題

山口 では今後の政治状況と政治課題ということで話をしたいと思います。安倍一強体制についてまず柿崎さんから。改憲2/3を割った、単独過半数を割ったということは、やはり影響を与えますか？

柿崎 改憲側からするとベストな票差でしょう。自公維プラスアルファが必要ということは野党から寝返る可能性が高まるということになります。国民民主の玉木裕一郎代表は、それをまんま言ってしまった。静岡で自民党の一部が国民民主の支援に回ったと静岡新聞が報じましたが、それは選挙後のことを考えてのことだったのでしょう。プラスアルファの人たちから言わせて、それに自公維が乗ると、ベストのシナリオではないでしょうか。

となると、憲法改正まで行き着けるかどうかは別として、少なくとも求心力は維持される。レームダックが必然な中で、求心力が維持されるという、求心力のために改憲があるというような話にもなるんじゃないか。本人が意識するかどうかは別として。

山口 安倍政権がこれから何をやるかという、大きな政策テーマとしては、改憲以外に何かありますか？

柿崎 やれるという意味ではもうないですね。

山口 外交、北方領土も結局うまくいかないみたいだし、アメリカとの関係でいえば、トランプからいろいろな要求をどんどん突きつけられて、それをもう飲み込んでいき続けるしかないのかなあという感じがすよね。

柿崎 だから今回初めて安倍さんが正面から改憲を言ったんじゃないですかね。アベノミクスだって広げまくった大風呂敷をどうたたくのか。

もしかすると両にらみなのかもしれませんね。4

選ともたなくなってきたら辞めて後継にやらせるの二つ。とりあえずでも何か軸がなければいけないので、悲願である憲法改正がそうなる。

山口 野口さんに政局の話は訊いても意味はないのだけれど、このある種の一党優位体制みたいなものがこれからも当分続くという感じでしょうか？

野口 長期政権になってはいますが、政権のレジティマシーはかなり脆弱なのではないかと思います。レームダック化しないために、改憲で政局を引っ張ろうとする。しかも世論調査の結果を見ると、今のところ、その改憲ですら、世論の支持も関心も高いわけではない。広告を打てば何とかかなと思っっているのでしょうか。あなたはなぜこの政権を支持するのですかと聞かれたときに、口ごもる人が多いという、この気持ち悪さとか不健全さみたいなものに向き合う必要があると思います。

すごく愚直な話ではありますが、ちゃんと選択肢があって、政党がフェアに競い合うという状況が通常状態だということを確認する必要がある。政権交代がなく、長期政権なのが当然だという「慣れ」が劣化を生むのではないのでしょうか。

山口 では高橋さん、安倍政権の今後について、政権指導者は何をするんだろう。

高橋 基本の見立ては柿崎さんに乗っかるわけではないですが、まさにレームダック化を防ぐために改憲のエンジンを吹かしつつ逃げ道は用意しておくということだと思います。ただちょっと気になるのは、今回安倍さんが応援に入ったところ1人区が意外と負けている。結局選挙に強いというのが彼の権力基盤の一つだったものが、ちょっと陰りが見えてきたのかなというところが少し囁かれだしている。

一強と言われているけど、そういう囁きがざわざわと広がり出すと、意外と権力というのはもろいところもある。実際に、ご本人は「疲れた」と周囲に漏らしているようなので、できるものなら改憲は仕上げたいと思っているでしょうが、さあ改憲だ、大勝負だみたいな一直線の筋書きでもないと思います。だから野党の側が腰を浮かせて、大変だ大変だと右往左往するのは愚かです。もっとどっしりする必要がある。

野党の今後

山口 安倍さんが選挙の直後に、少なくとも憲法について議論する国民の判断が示されたと言うのは、これはめっちゃくちゃな牽強付会な話で、そんな議論に野党は乗る必要はないと私も思います。野党がこれからどうすべきかということを少し議論したいと思います。国民民主党はどうなるのか。「生まれ変わって憲法論議をしたい」と発言した玉木さんは何を考えているのか一番安い時に自分を売ろうとする、それだけでも愚かと思うんですけど、柿崎さんどうご覧になっていますか。

柿崎 記者会見病がさらに悪化したんじゃないかと思います。ともかく今の地位を守るという方が一番になっているのでは。彼に接触した議員の話を集めてみると言っていることの整合性がつかないんです。相手が離れないように空手形切っているような感じです。かといってそんな彼を変えようとする元氣も党内にないというところが、非常に悩ましいところですよ。

山口 国民民主は、政党としての信頼性もうなくなつたし、ちょっと、あまり持続するという感じがしなくなりましたね。

柿崎 もう少し早く壊れるかと思ったら、なんか微妙なところなので。

山口 まだお金もあるし、議員にとってはここにとりあえずいるしかないというある種の引きこもり状態ですね。ただ、先ほどのブロックという話で言えば、次の衆議院総選挙に向けて野党ブロックをつくらないと、また自民党が圧勝して終わりという結果が見えていますから、野党の側から何か主体的な努力をしなければなりません。これについてはどういうイメージになっていくんでしょうか。

私は正直言って、共産党を含めて野党ブロックをつくって政権を取りに行く絵を自信を持ってまだ描けない。参議院選挙の前にとりあえず5野党会派を集めた市民連合提案の共通政策なるものは、参議院選挙だからまあできたわけですよ。正直言って国民民主も枝野さんにしても、あまり本気でコミットする気持ちもなしにサインしたのだろうと推測

はつきます。私は選挙前にあまり厳密な政策論をしても仕方ないと思いましたが、衆議院選挙はそうはいかない。政権選択だということになる。

柿崎 少なくとも代表、幹事長で言うと、市民連合の存在は大事だと思います。直接組むことを避けることができる。ただ、それが衆議院にも当てはまるかというと、それはまた別問題です。

政権選択の衆院選で共産党と直接組むと連立政権ということになってしまうので、枝野さんは、市民連合にもう少し頑張ってもらいたいというところだと思います。

山口 野口さん、学者の立場から、野党がこれからブロックを仮につくるとして、どういう旗印を立てるべきだと思いますか？

野口 はっきりしているものというのは、いくつかあると思っています。僕はドイツで勉強していて、途中で奨学金が切れたりして大ピンチでしたが、あの国は基本的に授業料がかからないので、なんとかサバイバルできました。アメリカに行ったら、私立大学でしたら年間400～500万円かかりますよね。教育を権利として捉えて、高等教育の無償化に向かうのか、あるいはアメリカの方に行くのか。今日本でも大学の授業料はじりじり上がっています。学費政策でどっちに行くんですかというのは結構しっかり旗が立つ話だと思います。

あと、小泉元首相が原発をしきりに話題にしています。エネルギー政策についてもやっぱりどっちに行きますかという話をちゃんと国民に問うて論争をしっかりとすべきです。そういうところに関して、野党は今まで利害関係者に遠慮してはっきりものを言うことを避け続けてきたんじゃないか。

逆に言えば、既成野党が「責任野党」であろうとするがあまりに、与党との違いが見えにくくなり、「誰がやっても同じ」という空気が蔓延する中で、ポピュリズム政党が台頭して来たという構図です。問われているのは、わかりやすくしっかりとした骨太な選択肢をどうやって立てるかです。その大きなレベルで議論ができれば、共産党がどうのこうのという話は二次的になり、各党派が緩やかに手を繋ぐ可能性が見えて来る。

山口 市民連合をやっている、やっぱりまとめることが大事だから、ついいわゆる玉虫色とか曖昧なところで、みんながサインしましたみたいな構図をつくることに気を遣ってきた経緯がありました。そうすると外に対するインパクトは今ひとつ足りないという批判はされても仕方ありません。

野口さんが言われたように、次の総選挙で本当に明確な旗を何本か立てるということをちゃんと野党間で議論しながら、共通の土台をつくるという作業を本気でやれるかどうかですね。選挙前に急ごしらえで作文するのか、それとも今から1年ぐらいかけて積み上げていくのか。野党そのものの志が問われる局面です。高橋さんは今後の野党のあり方、有るべき方針戦略をどう思いますか。

高橋 やはりふらふらしすぎではないか。その1点で、この人たちに政権任せて大丈夫だろうかと不安になる。与党に鼻面を引き回されすぎです。なんでもっとどっしりできないのかなと、単純にイメージの問題としてはあると思います。市民連合は確かに大変だと思うんですけど、市民連合が噛むか噛まないかは、個別の選挙区を見ても、私たちは市民連合と約束するんですという形にするということで大同につける、支持者に対してもなんとなく言い訳が立っているということが有るので、そこは引き続きよろしくお願いします(笑)。

山口 言い訳が立つための協力だと、目一杯頑張っても改憲阻止で終わるんです。その先突き抜けて政権取りに行くときには我々がダミーみたいにして間に入って野党協力態勢をつくってもあまり力が出ないという気がするんです。

その後、国民民主の混迷を受けて、枝野さんが国民民主や野田佳彦元首相のグループに統一会派を呼びかけました。参院選での不振を受け止めて、枝野さんが野党共闘の強化に踏み出したことは注目されます。

高橋 野口さんがおっしゃるように、旗の強さ、旗の大きさと骨太加減によっては、それが明確に立つことによって、政党間の細かな差異みたいなものは気にならなくなるという面もありますよね。

山口 骨太の旗ということで言うと、やはり山本太

郎のインパクトをどう今後つないでいくのかというのは絶対に欠かせない課題になるわけです。柿崎さん、今の段階で「れいわ」を含めた野党協力の可能性というのはどう見えていますか。

柿崎 すでに、「れいわ」側はカードを切ってきていて、廃止と言っていた消費税について少なくとも5%というかなりの譲歩つばい軸を出してきています。あれに乗るとなると結局、政策的には「れいわ」中心になります。だから枝野さんは思案どころなんですけど、やらざるを得ない局面になるのではないかと。具体的に、消費税対応をどうまとめていくか私には今、思い浮かびませんが。今回の参院選は、国民民主とどっちが野党第1党かを決める準決勝と位置付けることができましたが、衆院選はそうはいきませんので。安倍政権側からはまたまた国会対策で、解散カードではなく、解散風カードがちらつかせられるでしょうからそれに右往左往するのを防ぐためにも体制づくりはすすめなければなりません。そこはやはり政党ブロックということになるのではないのでしょうか。

その中で例えば国民民主の一定程度を立憲が吸収して、「れいわ」と、立憲が吸収しきれなかった小さくなった国民民主と。だから、立憲、「れいわ」、国民民主の順番になる。政策的には多分、「れいわ」、立憲、国民民主。政党ブロックとなると連立です。首相候補を決めないといけなくなります。それが枝野さんか、山本さんか。これは消費税以上に難しいかもしれません。

だから、憲法改正という軸を入れた方が区切りしやすい上に、公明・創価学会サイドが緊張感高まってきて、ついていけないという人たちが余計増える可能性がある。僕は区切り方の一つとして憲法改正を軸にした方がいいと思いますね。

憲法を軸に与野党分けする。維新とか国民民主の一部を与党化しちゃう。そもそも憲法で与党と同じままとまりになるというのはある意味、「超与党」じゃないですか。

野口 政治ゲーム的には、すごい、なるほどと思ったんですが、憲法の話を押し出すって一般の国民にとっていいことですかね。

柿崎 憲法の話をしよというのではなくて、思いつき護憲になるということです。そうなると、与党サイドが出てくるので。というやり方になると思います。

野口 だからそこで争点をつくって政治を動かしていくということが、僕らにとってそんなにハッピーなのかということです。どうもそうは思えません。あんなほどとは思いましたが、そういうふうには今後何年間か日本の政治を動かしていくということについて、僕はあまり乗り気ではない。憲法を前に出して、それで議席の取り合いとか、整理をするということをやると、むしろ考えなければいけないのは、安倍以後でしょう。

つまり憲法の話が1回後景に退いた後、僕たちはどのように社会を立て直すのか。あるいは、アベノミクスは行き詰まっていますが、それがわかっているにしても、どのような出口をつくったらいいのかわからない。なので学生は安定志向にしがみつきます。安倍以後をちゃんと考えなければならない。しかしその軸は憲法ではないような気がします。

柿崎 右にも左にも政治手法としてポピュリズムが出てきちゃっている。結局、地道に真面目にその話をするごちゃごちゃになってしまう。維新も奨学金の話はするし、立憲もするしということで、出口戦略の話はつくろうとしたんですけど、間に合わなかったんですね、立憲は。

野口 間に合わなかったということなんですか。

柿崎 ええ、その手前で、政治の駆け引きをやってしまった。やはり人が少ないんでしょう。

山口 高橋さんは今ちょっと出た、ポスト安倍の政治の大きな構図というのはどういう形になるべきだと思いますか。確かに柿崎さんが言うように、改憲というテーマを出せば2極化ができて、与党対野党という構図が描けますけど、それって本当に日本の抱えている問題解決につながるような政治ができるのか。僕もやや懐疑的なところはあるのですが。

高橋 安倍さんの後は相当大変ですよ。本当に。経済でも、もっと言うと、人心の荒廃というか、官僚機構とか含めた話になりますが、安倍さんは自分の一番良いタイミングで去って行けば良いです。

れど、その後を任せられた人たちのさせられる尻拭いの度合いというのは相当なことなので、憲法とか言っている場合ですらないという気がします。

政治的なアパシーみたいなものが有権者の中に一定程度広がってしまっているということも含めて、野党勢力をどうつくるかとか、政局をどう動かしていくかとか、政党ブロックをどうつくっていくかというよりももっと根本のところ、民主主義が壊れかけている、とか言う不安をおおるようでイヤなんです、かなりまずい状況に陥る可能性もゼロではない。

国会議員や政党がもっと危機感を持って、今のうち、まだ民主主義的な体力が残っているうちに立て直さなければいけないことがたくさんある。その意味で、改憲論議なんか政治家の逃げだと思うんですね。解決しなければならぬ具体的な課題は山積しているが、なかなかすぐに結果は出ない。でも改憲と言っておけば何か大きなことをやっているような、前へ進んでいるような印象を与えることができると。改憲に逃げ込む政治で良いのかということ、やはり問うていかなければいけないと思います。

山口 人心の荒廃というのはすごく良い表現だなと思いました。私はやっぱり安倍政権というのはいろいろな意味で、政治を荒廃させたなと思うんです。例えば日韓関係は今相当悪化していると言われてるけど、昔の自民党だったら、裏でちゃんとパイプを持って、ほどほどのところで打ち方やめみたいな議論をする人がいたと思う。

今はあっちが悪いんだみたいなことを一生懸命国内向けに吹聴して、どんどん対抗策をエスカレートするという不毛なことを繰り返して、この問題も出口なしですよ。少し妥協しようとかある種融和的な姿勢をとると、それはもうナショナリストからボコボコにたたかれるみたいなことが容易に予想されるから、勇気を持って現実的な交渉をしようとか言い出しにくい状況を、今安倍政権がつくっている訳です。

だから国内の経済政策にしても、外交にしても、すごく目先の支持を高めるために、いろいろな政策のツールを動員しているけど、整合性もないし副作用も一杯あって、最後どうやって收拾するんだろう

かという、難問山積の状況が見えてくるんですけど。どうでしょうか、野口さんの専門であるウェーバーの指導者論をここで少し日本で展開するとしたら、どういう指導者を求めたいですか？今の指導者にどういうことを求めたいですか？

野口 先ほど高橋さんがふらふらしすぎという話をしていましたけれど、多くの政治家がその日その日の自分の言ったことが、ツイッターなどでどう書かれているかということをもすごく気にしている。ちよつと違うじゃないですか、それは。

次の選挙の問題もあるかもしれないけれど、政治家は、何十年か先のことを考えなければいけない。そのうえで何か理念を語るというのがやはり政治家の一番の仕事だと思います。どっちに行くのか、どいう方向に行くのかという。

遠くを見ることができなくなれば、そのぶん目の前のことに振り回されてしまいます。ウェーバーは信条に固執して現実的な対応ができない信条倫理的な政治リーダーを批判しましたが、今はむしろ「現実的」であろうとするあまり、信条が見えにくいことの方が問題だと思います。

山口 野口さんが訳した、『仕事としての政治』を全国会議員に読ませたいですね。本当に。大体予定した話は終わったかと思うんですけど、あと連合の話は何かコメントありますか？連合が政治的に何か関わっていく動機付けというのを失うのかなという気もちよつとしているんですけど。

柿崎 すでに分裂状態です。

山口 昔の社会党、民社党の時代。

柿崎 立憲と国民民主に分かれたということ。

野口 ヨーロッパの社民系の政党はどことも組合の組織力の低下に苦しんでいます。組合員も減り、動員も難しくなっている。特に日本だけの話ではありません。

山口 そういう意味で言えば、あまり連合に頼るのではなくて、それぞれ政党がいろんなネットなどのツールも使いながら、支持者を掴む努力をするという時代なんではないでしょうか。

柿崎 人間の感情や思考というものに対して、良い悪い問わず極めて大きな影響も与えているんでしょ

うけど、扇情というマイナスの部分が政治的に利用されている状況が全世界的に出てきてしまっている。ついにイギリスでもです。

正直いうと最近、国際政治がすごくわかりやすくなったんですよ。私は超が付くドメスティック人間ですが、長年にわたって国際社会の地道な努力で積み上げられてきたマルチや共同体のルールが無視されるようになってきた。かつては、それを理解していないと国際政治は理解できないところがあった。それが今は各国のリーダーがそんなこと知ったこっちゃない、自分の国のこと、もっと極端に言うと自分の支持者のことだけ考えればいいんだ、みたいな人たちだけになりつつある。交渉も面倒なマルチではなく、バイで駆け引きをやりとうとする。考えていることが、私レベルで浅いですから、すごく分かりやすい。これは、かなり危機的な状況だと思います。

別の見方から言うと、勝手な行動をとる国やリーダーに対する様々な歯止めがきかなくなっている。ルールを否定するような人たちが選ばれ始めたからです。そして、この人たちにマックス・ウェーバーを読めといっても多分読まない。反知性主義も最近の特徴です。

野口 大体昔から日本の政治家って、政治とは「硬い板に穴をあける」作業だという『仕事(職業)としての政治』の最後の部分しか引用しないですけどね。

柿崎 実はそれも最近のコラムで書いたんです。僕が一番面白いと思ったのは、「成り上がり者の大言壮語」、こんなやつが駄目だと書かれていますが、今、こんな人ばかりですよ。

山口 確かに各国の政治が非常に似てきたというのは悩ましい現象ですよ。

柿崎 ロシアのプーチン大統領や中国の習近平国家主席がまともに見えちゃっている。

まとめ

山口 そんなに単純な希望はないのでそういう問題を認識しながら、さっき野口さんが言われたように、やはりもう1回野党でも自民党でも政治家が課題を直視して、ビジョンを示すことを望むというよう

な話が多分最後の結論かなと思いますが、最後これを言っておきたいということがあれば。

柿崎 絶望的なんですけど、ただ、永田町の外に目を転ざると、藤田孝典さんや湯浅誠さん、不条理に真正面から向き合って、実践を通じて、個別的な対応策を取り、それを一般化するためにアジェンダセッティングもするという方々が登場し始めて、10年以上過ぎたのではないかと思うんです。

あの力、現実と格闘する中から出てきている言葉と行動力というのは、非常に強い。行動力はあるが、総じて威勢の良さからは縁遠く、忍耐力もある。彼ら、でなくてもいいですが、彼らのような人材をリクルートできれば、記者会見病を克服できるのではないかと感じるんです。

高橋 代表制民主主義、代表する、代表されるということの意義を今、見出しづらくなっていると思います。こうも訳がわからなくなった時には政治家の、生身の生き物としての肉体性や体温を感じさせる言葉が意外と大事なんじゃないか。山本太郎さんの演説もそうですし、立憲だと格闘家の須藤元氣さんが握手しながら全国行脚して、元々の知名度があったとはいえ当選を果たしている。

ネットという空中戦がある一方で、言葉を交わす、体温を感じる、そういう原初的な政治への回帰みたいな側面も垣間見えたことがちょっと希望かなと。ポピュリズムの危険性にはもちろん目配りする必要がありますが、政治的無関心や諦めが広がるよりは、次の地平が開ける可能性があるかと、個人的には思います。

野口 いろいろな可能性を持った人が、多分若い人でもいるんですけど、政治家にはなれないですよ。ものすごく世襲が多い。マックス・ウェーバーの翻訳でいうとプルトクラシー（金持ち支配）という言葉を使うんですけど、勉強するにしても金がないからできない。政治家になりたいくても、なる気はあってもそのバリアーはすごく高くなっている。そうしたなかであって、そうだからこそ、「れいわ」は小さくても希望たりえているんだと思います。■